

# イメージに基づく比喩の危険性

● 村 越 行 雄

## 1. はじめに

比喩は日常的に頻繁に使用されている表現方法であり、比喩なしには言語表現はあり得ないとまで言う研究者もいるくらいである。しかし、比喩はあくまでも人々が抱く信念やイメージによるもので、決して客観的な事実に基づくものではない。それだけに比喩による誤解→偏見→差別という悪循環が生まれる危険性を絶えず持っていることになる。ここで、簡単な検討を加えて、少し考えてみることにする。

## 2. イメージに基づく比喩について

比喩は、ある特定の時代の、ある特定の地域で人々が共通して抱く信念あるいはイメージに基づくものであって、科学的に、客観的に検証される事実に基づく訳ではない。勿論、主観的なイメージと客観的な事実が一致する場合もあるが、本来は異なるものである。それは、別の視点から言うこともできる。発話は字義的発話と非字義的発話に分類でき、前者が文字通りの意味で、事実をそのまま直接的に言うものであるのに対して、後者は文字通りの意味で解釈すると偽になってしまう発話で、事実をそのまま直接的には言わないもので、例えば、比喩と含意がある。つまり、比喩は事実をそのまま直接言うのではなく、間接的に言うものである。

比喩が事実に基づくものでないことは明らかである。そして、例えば、「君は、豚だ」や「君は、ゴリラだ」と言う場合、たとえ私が豚をペットとして可愛がっていても、ゴリラを愛情深い動物であることを知っていても、言われた相手は否定的に捉えて怒るのであって、それはあくまでもある特定の時代の、ある特定の地域の人々が共通して抱く信念・イメージであって、決して個人的な感情や知識によるものではないことを意味する。それは時代を、文化を、社会を反映するものなのである。事実に基づかない比喩だからこそ、個人ではなく、みんなが共通して抱く信念・イメージに基づく比喩だからこそ、その危険性の怖さは計り知れないのである。

他方で、比喩の良さもある。そのような定義に従う限りでは、比喩は文化限定性という特徴を持つことになる。文化特有の比喩になり、それは文化特有の人々が抱く信念・イメージのことになる。他にはなく、それだけが持っている文化の特有性、さらには元々それだけが持っている文化の固有性でもある。

結局、比喩というものは、客観的な事実ではなく、主観的なイメージに基づくからこそ、個人ではなく、ある特定の時代の、ある特定の地域の人々が共通して持つイメージだからこそ、文化の特有性と固有性という肯定的なものをもたらす一方で、文化の危険性という否定的なものももたらす結果になる。なお、文化については、自文化と他文化の関係だけでなく、自文化内でも、地域によって、時代によって様々な文化が存在することになり、従って自文化の特有性と固有性を認めると同時に他文化の特有性と固有性も認める良い関係として認めず、否定する悪い関係は、自文化と他文化の間だけでなく、自文化の中でも起きることになる。最悪の例は、人種差別、性差別などがある。

### 3. 比喩が持つ危険性について

上記は比喩一般について言ったことで、比喩には様々な種類があり、代表的な隠喩、換喩、埤喩の他にも、誇張法、擬人法など多くのものがある。そして、上記はそれら全てに適用されることになる。従って、人種差別のような隠喩に基づく大きなものから、誇張法や擬人法に基づく小さく、日常的に気づかずに使っているものまで幅広く比喩の危険性が広がっていることを意味する。誇張法は、事実から離れて過大あるいは過小に言うことであり、何にたとえて誇張されるかによって日常的に傷ついた経験は多くあるでしょう。擬人法にしても、人間以外のものが人間のように行動することで、人間以外の何が人間のように行動するかによって驚いたり、嫌な気分になったりした経験もあるでしょう。日常的に、余り気がつかないところで浸透しているだけに、逆にその怖さも大きいと言える。例えば、身体的な特徴（身長、体重など）を誇張する時、何にたとえるかで容易に相手を傷つけるし、人間以外でも、動物なら可愛い、霊的なものが人間のように話すとなれば、驚くし、嫌な気分にもなることがある。

結局、比喩に基づくとされるイメージに問題があるのであって、比喩自体というよりは、むしろイメージそのものが様々な危険性を潜ませていると言える。勿論、そのようなイメージが入り込む余地を持っているのが比喩自体であり、事実には直接結び付かないところで、例えば、比喩であれば事実以外のところで（「君は、ばらだ」と言って「君は、美しい」を意味するように、ばらという植物とは異なる人間について、美しさという類似性によってたとえられる）、比喩ではないが、含意であれば事実以上のところで（「足を踏んでますよ」と言って「足をどけてください」を意味するように、足を踏んでいるという事実、そしてそれに加えて、足をどけるという依頼をする）行われている。ともかく、事実以外の比喩であれ、事実以上の含意であれ、事実とのズレに問題発生の原因が存在するのである。

### 4. イメージについて

事実ではなく、イメージに依存することに、むしろ両者のズレに問題発生の原因があると考えたと、当然のことであるが、次にイメージとは何であるのかを問わなければならなくなる。

イメージは事実との関係の中に置かれて見られるべきもので、従って事実と一致する場合もあれば、一致しない場合もある。イメージと事実の一致関係は、事実がそのままイメージとして写し出され、事実に基づくイメージと言えるようなものになる。そして、イメージと事実の不一致関係は、事実がそのままイメージとして写し出されず、何らかのズレが生じたり、何らかの分離が起きたりして、事実に基づかないイメージと言えるようなものになる。例えば、写真の場合であれば、事実を100%そのまま映し出す像を得ることができるが、絵の場合になると、いくら正確に描いても、100%そのままの事実の像を得ることができず、抽象画であれば、絵を見ても全く事実が何であるのかが思いつかないこともある。まさに、このことが私たち人間の頭の中で起きているのである。

私たちは語を使用して、対象を認識している。例えば、目の前にあるリンゴを見て、リンゴであると認識する時、「リンゴ」という語によって認識する。仮に「リンゴ」という語が全く存在しないと想定すると、その対象の形や色などで認識すると言うしかないが、リンゴ以外の物があるとして、形や色などが全く同じである場合、その対象がリンゴであるのか、それともリンゴ以外の物なのか、一体どのようにして識別するのか？私たちは「リンゴ」という語、つまり「リンゴ」という概念を持っているからこそ、ある対象をリンゴであるとか、そうでないとか言えるのであって、「リンゴ」という語を持っていなければ、対象を認識できないし、仮に語ではなく、

ある対象の形や色などだけで認識するとしても、他の対象と同一なのか、異なるのかをどのようにしたら識別できるのか？少なくとも、「リンゴ」という語がなければ、ある対象を見て、「これは、リンゴです」とは言えないのである。勿論、「リンゴ」という語の代わりに、例えば、「X」やその他の語（記号もこの中に含める）であっても構わない。たとえどの語であれ、語なしに対象は認識できないことを問題にしているのである。

「リンゴ」という語、「リンゴ」という概念は、形や色、その他にも味、感触、匂い、重さ、旬の時期、皮の下の中身の色など、多くの性質によって定義されており、そのように定義された語を使用して、対象を「リンゴ」、「梨」、「柿」などの語を使用して識別し、分類しているのである。従って、認識とは、数量を1つ、2つ、3つと数えるように、時間を1時、2時、3時と区切るように、それと同様に、対象を語によって分類することであり、リンゴという同種類の中での比較とリンゴ以外の種類との比較を含むことになる。ここで言う認識とは、対象の形を丸いとか、色を赤や緑とか、形や色自体を認識することではなく、あくまでも対象の物全体を認識することであり、その意味から言えば、物自体に付けられた名前によって認識するしかなく、語による認識は最初から明らかであるとも言える。なお、形を丸いと認識する為にも、「丸い」という語、「丸い」という概念がなければ、「これは、丸い」とは言えないし、色も同様で、結局全ては語による認識となる。

対象のイメージ、言い換えれば、語のイメージは、どのように形成されるのか？対象を認識するのは、語によって認識すると言ったが、同様に、対象を見て浮かぶイメージよりも語を聞いて浮かぶイメージの方が優先される。例えば、日本中には、さらに世界中には、多くの種類のリンゴがあり、形、色、重さ、味など、様々な性質が異なっている。数多くある種類のリンゴの全て、また同一種類のリンゴの全てを見て、触って、味わって、それでリンゴのイメージを形成させるのではないし、私たち個人が経験できる範囲は非常に狭く、従ってそれは土台無理な話である。非常に少ないリンゴの経験にも関わらず、私たちの誰もがリンゴのイメージを持っている。もしリンゴのイメージが個人の実体験によって形成されないのであれば、何がイメージを形成させているのか？それは、語のイメージである。

私たち個人の経験には限界があり、実際にリンゴを見て、触って、味わったりすることには限界があるが、私たちは他の人たちから、雑誌、本、パンフレットなどから、「リンゴ」という語を使用した、リンゴに関する発話や記述を絶えず得てきた訳で、そこからリンゴのイメージが形成されるのである。例えば、リンゴの形、色、匂い、重さなどの性質だけでなく、リンゴの調理法、リンゴの保存法、リンゴの産地、リンゴの価格、リンゴによる健康法など、数え切れないほどのリンゴの情報を「リンゴ」という語の使用から得ており、それらがリンゴのイメージを形成しているのであり、従ってリンゴのイメージ形成は、対象のイメージよりも、むしろ語のイメージに依存する程度が遙かに大きいのである。そうであれば、リンゴのイメージは、対象であるリンゴ自体から来るイメージではなく、「リンゴ」という語の使用から得られるイメージによって形成されると言える。

## 5. 概念の世界とイメージの世界について

イメージとは、対象自体から得られるイメージというよりは、むしろ語の使用によって得られるイメージのことであると考えれば、語は概念のことであるので、単純化して、私たちは現実の事実という世界で生活しているが、本当は概念の世界で生きており、イメージの世界で生きていくということもできる。そして、人間の外にある事実と人間の内にある概念やイメージが関係す

る訳で、そこでは外と内が一致する関係や一致しない関係が可能になってくる。

外と内の関係は、素直に考えれば、外がそのまま100%内に写し出され、そのままのイメージが内に浮かび上がり、概念によって認識すると言えよう。リンゴを見て、頭の中にリンゴのイメージが浮かび、リンゴと認識する、と素直に考えることはできる。しかし、外と内の関係は壁のように両者を分断する。例えば、まっすぐな棒を水に入れて曲がって見える時と最初から曲がった棒は異なるものであるが、イメージとしては同一になるとか、逆に同一の物は見る角度によって異なるイメージになるとか、またピンクの象のように、実際には存在しないが、頭の中でピンクという概念と象の概念が結び付くとか、外の世界から切り離され、関係ないところで内の世界が存在し、あたかも内には内の論理があるかのように、自由勝手に何でもできる世界があるかのようなのである。極端な例としては妄想があるように、頭の中では何でも考えることができ、不可能は存在しないかのように感じるほどである。

語は概念であり、それは内にある概念が外に出て表面化するのが語であることを意味し、外と内を橋渡しするように、外にある事実と内にある概念やイメージをつなぐのが語となる。しかしまた、語は概念であって、内にしか存在しない概念やイメージ(事実とは関係のない概念やイメージ)を表すこともできる。従って、語は概念であるが故に、外と内をつなぐ橋渡しであると同時に、内だけの論理で終始することもあり、そこに危険性が潜んでおり、意味のない言葉を言うとはそのことである。

イメージ形成では、対象のイメージよりも語のイメージの方が優先されると言ったが、まさにその語の使用(例えば、意味のない語や根拠のない語をただ並び立てる)自体にすでに危険性が潜んでおり、歪んだイメージになる可能性がある。概念の世界で生きており、イメージの世界で生きている私たちにとっては、絶えず歪んだ概念やイメージの危険に脅かされているのである。

## 6. 語のイメージと比喻について

イメージに基づく比喻とは、結局のところ、対象のイメージというよりは、むしろ語のイメージによるものであって、そのイメージに問題を引き起こす危険性があることが明らかになったと思う。それは、比喻の場合、事実から離れて、語が勝手に一人歩きをすることを意味する。もし対象のイメージを固守するのであれば、事実から離れて、勝手に一人歩きをすることはできないはずである。ところが、語のイメージとなると、語が使用されて定着するには時間がかかり、従って語の使用によって人々が抱くイメージも広がり定着するには時間がかかり、その為に事実との時間差が生じてくる。さらには、修正・変更不可能性になることもある。

例えば、「君は、ゴリラだ」の「ゴリラ」という語は、観察結果として、粗野で乱暴であることが事実とされ、そのイメージを持つことになり、それが時間をかけて、人々の間に広がり定着してきた。しかし、ゴリラが愛情のある動物である、と科学者が発見し、事実であると証明しても、「ゴリラ」という語のイメージは、前のイメージのままで、新たに発見された事実によって修正されたり、変更されりすることはない。事実から離れて、語が一人歩きをしているのであり、語のイメージが一人歩きしているのである。たとえ最初は事実から出発しても語は一人歩きをするし、後になって、それが事実ではなく、事実であると信じられていたことが証明されても、語はひたすら一人歩きをするのである。

また、例えば、「黒人」という語のように、「黒い」という語は、肌の色の黒さという事実、そして衣類などが汚れて黒くなるという事実を合わせて、それを人間に当てはめて、黒人=汚いできた訳で、最初から事実ではないことを、長い間事実ではないことが主張され、証明されてき

たにも関わらず、今でもそのイメージが消えないのである。まさに、語が一人歩きをし、語のイメージが一人歩きをすることの根深さを思い知らされる例である。それは、イメージに基づく比喩の最大の危険性である。

もし対象のイメージであれば、対象である事実が変化すれば、それに合わせてイメージも変化するはずである。ところが、語のイメージは、一旦語にあるイメージが付けられ、広がり定着していくと、固定化され、不変化されてしまう傾向があり、その為に語の指示対象である事実がたとえ変化しても、それとは関係なく、前の語のイメージが存在し続けることになる。勿論、全ての比喩がそうであると言っている訳ではない。比喩で使用される語の指示対象である事実が何であるのかによって大きく左右される。事実によるイメージの変更がしやすい領域としにくい領域、変更が可能な領域と可能でない領域があるよに思われる。例えば、黒人の例はイメージ変更がしにくい、可能でない領域に属するであろうし、性差別や身体障害者などに関する表現は絶えず変化しており、イメージ変更がしやすい、可能な領域に属するものであると言えるが、未だに適切な表現に辿り着けず、これからも変更を続けるであろうと考えれば、やはりイメージ変更がしにくい、可能でない領域に属するのかもしれない。

以上のように考えてみると、語のイメージではなく、対象のイメージであるべきで、それが問題解決の唯一の方法であると思われるかもしれない。しかし、すでに指摘したように、私たち人間は対象をそのまま物理的な意味で頭の中に入れることができず、対象を認識するにしても、対象について思考するにしても、対象について判断するにしても、必ず語を使用して対象を認識し、対象を考え、対象を判断するのであって、それしかできないのであって、そのようにして対象を意識的な意味で頭の中に入れることになる。その意味で、イメージはどうしても語のイメージになってしまうのである。

## 7. 比喩と危険性について

比喩は日常的に、至る所で使用される言語表現であるが、事実に基づくのではなく、あくまでも人々が抱くイメージに基づくのであり、しかも事実何らかの直接的な関係を持つ対象のイメージではなく、語のイメージに基づくもので、そこには事実との関係を持つような語の使用の場合もあれば、そうでない語の使用の場合もあり、比喩はイメージの危険性と語の危険性の2重の危険性を持つことになる。それは、一言で言えば、外と内の壁であり、内だけに向かうことである。

また、文化、社会、時代などの関わりがある。比喩は文化を反映し、社会を反映し、時代を反映する。大きな流れの中で比喩が誕生し、発展し、定着し、固定化されていくのである。固定化されるからこそ、文化や社会や時代を反映したり、その象徴であると言えるのである。個人にはどうしようもできないことである。ただ、すでに出来上がって、広く人々に知られるようになった、複数の比喩の中から選択することが、個人のできる唯一のことである。つまり、大きな流れの中に身を置くしかないのである。できることと言えば、比喩を使用しないようにすること、しかしこれは不可能なので、危険性の少ない比喩を使用するしかないのである。

例えば、日本文化は日本に特有の文化であり、他の文化とは異なるものであると言われる。従って、日本特有の比喩があり、個人ではどうすることもできない慣習であり、ただし従うしかなく、従わなければ、日本文化から、日本人から逸脱すると捉えられてしまう。勿論、他の文化にも同様のことが言える。従って、文化によって規定される比喩は、伝統的に長い間人々の間で継承されていくのであり、その際比喩の形式が継承されていき、内容は問われることなく通り過ぎ

ていく。「めし」や「ごはん」は米を炊いたものであるが、「めしにしよう」や「ごはんにしよう」は、単にお米だけを食べるのではなく、肉や魚や野菜など、食事をするのであり、これは慣習によって決まっていることであり、私個人が「パン」や「パスタ」などを使っても食事をするにはならない。つまり、時代によって主食が米からパンやパスタに変化しても、内容の変化に関係なく、めし＝食事やごはん＝食事という形式は残り、変化することなく継承されていくのである。

そうであれば、誤解、さらに偏見、さらにまた差別を生むような危険性のある比喩であっても、文化や社会や時代によって規定される比喩は、たとえ内容（事実）が変化しても、形式（言い回し）は不変であると言える。しかも、悪いことに、個人にはどうすることもできないのである。だからと言って、見過ごしてそのままの状態ではしておくことを勧めている訳では勿論ない。

## 8. 最後に

比喩は広く、深く浸透しているだけに、避けて通れないものであり、日常的に安易に使用している。比喩なしでは何も言えないほど重要で、必要不可欠なものであるが、そこには様々な危険性が潜んでおり、知らずに使用することで、相手を傷つけ、しかもそれすらも気づかずにいることがよくある。比喩はコミュニケーションの土台を成し、人間関係の基礎を成すものであり、その意味で、問題意識を持って接することを望んで、簡単に比喩について述べてきた。そして、比喩は一般的には言語表現として捉えられているが、それ以外にも、認識、思考、判断、行動などにも比喩は重要な役割を果たしており、比喩の重要性と危険性はさらに増すことを考えて、問題意識も高める必要があると思ひ、比喩を取り上げた。